平成30年10月22日(月)通巻1627号　昭和47年12月11日第3種郵便物認可 毎週月曜日発行(第５月曜日休刊)

週刊 教育資料

2018年 10月22日号
No.1497
EDUCATIONAL PUBLIC OPINION
http://www.kyoiku-shiryo.co.jp

〉〉〉 好評連載

校長講話【地域との連携による教育活動の充実】井口寛隆／東京都武蔵村山市立第三中学校校長
法律相談【子どもの問題行動と年齢による処遇の差】三坂彰彦／弁護士
危機管理【学校環境衛生基準改正と災害対応】鬼頭英明／法政大学スポーツ健康学部教授

▼資料【第16回21世紀出生児縦断調査の結果(概要)】
◎文部科学省

▼マイオピニオン【子どもは心肺蘇生の強力な助っ人だ】
◎尾﨑春樹／学校法人目白学園理事長

▼実践！校長塾【ものつくりから流通・販売まで学ぶ産業科高校に】
◎菅原敏雄／東京都立橘高等学校校長

▼潮流【武道を通して日本文化の精神性学ぶ】
◎髙津庸／ＮＰＯ法人日本文化武道研究所理事長

髙津庸

たかつ・いさお◎1976年、東京都生まれ。1995年、都立駒場高校在学中に柳川道場へ入門、卒業後は２年間空手に専念する。1998年にIT企業へ就職し以後プログラマー、システムエンジニアを務める。2002年より目黒武道研究会を主宰。2011年にNPO法人日本文化武道研究所を発足、二聖二天流柔術憲法目黒道場を開設し代表を務める。

潮流

潮流◆題字奥野誠亮

NPO法人日本文化武道研究所理事長

髙津庸氏に聞く

武道を通して日本文化の精神性学ぶ

自らも空手など武道の修養を通して日本の武道の精神性の重要性を実感。それを現在の社会に正しく伝承し、生かしていく必要性を訴える。

武道を主に日本固有の文化を研究

――NPO法人日本文化武道研究所の理念について教えてください。

この法人は、武道を主とした日本固有の文化を研究し、本来、高度に完成されていたその術理や精神を正しく伝承して、広く一般に普及させる活動を行うことを目的としています。2011年度に設立しました。

――日本文化やその精神性について、どのように受け止めていますか。

昨今、日本は文化や風習、食習慣など様々な分野で世界各国から注目を浴びています。世界中の人々によって武道が嗜まれている他、外国人力士が活躍したり、寿司職人や演歌歌手、落語家までもが出現したりしています。また、日本という国は、災害の多い国でもあります。未曾有の大混乱を来した先の東日本大震災でさえ、食料や物資が行き渡らなかったにもかかわらず、略奪がほとんど起こらず、炊き出しや物資の配給に殺到することもなく列を作り秩序を保っていたことに、海外の人々は驚きの目を向けました。

このように、他の国にはない素晴らしい文化や精神性を持ちながらも、我々日本人がその価値や根本を成すものに関心を持たず、よそ見ばかりをして、自国の文化や精

神性を衰退させようとしている現実があります。幸福を得るために必要不可欠なもう一方の要素、「心」の存在価値にそろそろ気付くべきではないでしょうか。それを理解し実践できる人材を育てるためにも、これからの教育の現場には、より意義の高い道徳教育が求められるはずです。

その「解」は、既に日本が歴史の中で見出した通り、私たちの精神面の価値は、古今を問わず日本を訪れた多くの外国人が気付いた事実です。そうした想いから、この日本文化や日本の精神の素晴らしい面を、誰にでも理解できるような形で残し、日本国内のみならず、世界に向けて発信していくことを目的に、この特定非営利活動法人日本文化武道研究所を設立しました。

――具体的な現在の活動内容はどういうものですか。

現在の主な活動内容としては、私自身が長年追究してきた空手道を中心とする武道教室の運営です。流名を二聖二天流柔術憲法と言いますが、私の師である柳川昌弘が、和道流柔術拳法を極めた後、単なる拳法に留まることなく広く自然に沿って生きる法を示したいという願いを込めて創始したものです。私は、その目黒支部を任されています。

今は大人の部のみに留めていますが、以前は5歳から小学生、中学生、高校生にも指導をしていました。武道は、心身の修養には非常に有効なものです。

かつての武士道精神を受け継いでいる武道には、暴力や権力に屈しない正義感、清廉潔白な心、そして寛容さや器量を育む土壌が多少なりとも残されています。ことに、子供から大人までが一つ所に集う町道場では、その傾向が強いのではないかと思います。異なる世代が共存し、人の中で揉まれ、人の中で育った子供たちは、10年後にはそれなりに芯があり、味のある人物に育っていくのです。私は、武道の道場こそが人間性教育を担う場所になるべきであると考えています。

精神修養で人間性の向上を

――武道は学校の体育でも扱っていますが、どう見ていますか。

武道では、その道を極める過程を「守・破・離」という語をもって説明します。「守」とは、師匠の教えや流儀の型をしっかりと身に付け基礎となる技術や知識を吸収する段階、「破」とは、自分なりの論理や思想が芽生え試行錯誤を行う段階、「離」は、自らの道のおおよその完成を意味し、一つの流儀を興す段階を表わしています。

ちなみにこれが「一流」の語源です。このことからも分かるように、武道の世界では、けっして個性を否定せず、むしろ一つの流儀を興せるような弟子を育てることが師たる者に求められたのです。

よく、「教育は子供の個性を潰しているのでは」という指摘があります。確かに戦後の教育の中で、当てはまる部分があるかもしれませんが、この「守・破・離」においても、最後は一人一人が自分で道を見つけることが大切と結んでおり、伝統的な武道の世界でも昔から個性の発露を重視してきたのです。

ですから、今後は、武道から精神修養の要素のみを抽出して体系化を図り、人間性教育セミナーやトレーニング、合宿などを通して、価値観の変革を起こし、人間性を向上させる教育プログラムを構築していくことが必要と考えています。

学校で度々問題となる「いじめ」についても、武道がその抑制に役立つ部分があると考えており、いじめ問題を専門に取り扱うNPO団体と連携を図りながら、どのような活動ができるか現在模索中です。

――子供を対象とした空手教室で指導をされていた時に感じたことは何でしょうか。

人数が多い場合は、集合練習が基本になるのですが、短い時間でも一人一人の練習

の様子を見て、アドバイスするようにしました。例えば、空手の「型」も、学ぶ側のレベルに応じて、練習内容が異なります。教える側の眼力も大切ですが、要は学ぶ側がイメージできるように、矯正するポイントを伝える言葉がけが必要です。この言葉がけは一人一人違ってきます。例えばサッカーの経験がある子供には、「ここにボールがあるイメージで、このように蹴ってみて」と指示することで、その子供がどう動くべきかイメージしやすくなります。

また、上手な動きができている子供が一人出てくると、続いてうまくできる子供が出てきます。つまり、うまくできた子供の動きをしっかり見て、自分でイメージを持って練習しているのです。その意味では、集合練習は互いの動きを見ることができるという効果があります。

また、その子供より少しだけレベルが上の子供がアドバイスした方が上達も早いことがあります。同じ課題を持っている者同士の方がコミュニケーションもうまくいき、的確なアドバイスができるということです。

人格者でもあった武道の達人

――昔から、武道の達人と言われる人は、強いだけでなく、人格者でもあったと言われています。

例えば、合気道の開祖である植芝盛平は、相手を倒す技術という側面を持つ武道の中で、「相手と気を合わせる」という意味で「合気道」と名付けています。結局、武道を突き詰めていくと、最終的には「合一」や「和」の領域に到達するということでしょう。

私の師匠である柳川昌弘は、もともとは和道流柔術拳法を学んだ人ですが、その開祖が流名を「和道」としたのも、同じ理由だと思います。講道館柔道の創始者である嘉納治五郎も「自他共栄」「精力善用」という言葉にたどりつきました。

――学校関係者へのアピールを。

今の時代、先生は、学校側に求められるものと、親御さんから求められるもの、生徒たちの主張との狭間に立たされ、いくら素晴らしい信条を持っていても、それを実践するのは容易ではなく、評価もされにくいのが実情でしょう。しかし、生徒たちの心に響く先生とは、彼らに「先生のようになりたい」と言わしめるような人間性を持ち合わせている先生です。要するに、先生自身が自らの人間性を高め、その精神をもって生徒の人間性を高める教育を真剣に考えていけば、生徒にとって良い手本となるばかりか、それが好循環を生み、さらに自身の人間性を高めることになるのです。

その努力はおそらく、学校や親御さんたちには評価されないだろうと思います。しかし、5年後、10年後、20年後に、生徒と再会した時、あるいは新聞や茶の間のテレビの前で、彼らの生き様に触れた時に、その努力は報われることになるでしょう。「人を育てる」という仕事は、そのような価値観を持っていなければ、務まらない仕事だと思います。

「先生」という仕事は、とても重大な使命を持つ、誇らしい仕事だと思います。将来を担う人材を育てるのですから、日本の未来を作ると言っても過言ではないでしょう。そのような重要な仕事に携わる先生方が、昨今報われない状況にあることは非常に心が痛みます。

かつての武士道が「文」「武」「徳」の修得という非常に高度な人間性を要求し、それに違わぬ大人物を輩出してきたように、日本の教育が、知識ばかりに偏らず、「知育」「体育」「徳育」を指導できるより高度な水準に至ることを切に望み、そして、先生方の努力が正当に評価される時が訪れることを願いたいと思います。

NPO法人日本文化武道研究所＝http://www.ijcm.or.jp/